

審査講評

平成22年度 北海道赤レンガ建築賞「日本生命札幌ビル」

施設の最大の特徴は、接する歩道に対するセットバックと、そこに連続したアトリウムである。札幌駅前通にも面するこの敷地は、中心市街地の構成にとって大変重要な位置だ。

この敷地で、赤レンガ庁舎の正面アプローチとなる北3条通りに面する部分を、大きくセットバックさせて得たオープンスペースは、銀杏並木と、駅前通りの街路樹、北海道庁前庭の木々に三方を囲まれた都市の貴重な公共的空間となった。路上から建物の全貌を見通せる場所は南西側で、大きなヴォリュームを持つ高層オフィス棟と、赤レンガ庁舎の軒高と揃えた低層アトリウム部分とのプロポーションは良く、外壁素材のそれぞれの持ち味が活かされ、看板類を一切排除したファサードの練られたデザインと相まって、極めて品の良い建築となった。

外部で得たオープンスペースは、そのまま施設低層部に付属して南面する大きなアトリウムへと連続し、この場所に内外一体となった公共的空間を創出した。このアトリウムは、5層の吹き抜けの周囲にめぐらした回廊や、外壁に沿ったブリッジによって構成されている。地上階では、南面する北3条通りはもとより、東西の通りとも繋ぎ、地下階では駅前からの地下通路や駐車場とも接続して、アトリウムに立体的な回遊性を生み出した。地上出入り口4箇所からアトリウムに至るアプローチにおいても、庇、階段、EV、照明といった必要機能が空間演出装置として息づき、質の高い表情を創り、インテリアデザインの随所に素材を変えながら現れるルーバー（襜）が空間に秩序を与えている。そこに集う人々にとって、見る見られる、見上げ見下ろす、見通すといった視覚的な親密さと、周囲に配した商業施設群の店内の気配が滲み出し、大きな壁面のアートワークと共に、質の高い空間となった。駅前通側に向けて北欧の生活雑貨を取り扱う店舗のショーウィンドウを設け、南側の外部に接してティールームやレストランを配するなど、アトリウムを取り囲むテナント構成にも工夫が見られる。

この土地の価値を深く読み取り、一企業の業務施設を建てるに際し、街づくりに参加するというより、むしろ積極的に先導し、率先した手法を駆使して計画し建設した姿勢を高く評価したい。都市に貢献する建築として、新たなプロトタイプとなり得る。設計者のみならず、計画事業主が持ちえた、都市に向けた視座の先見性に敬意を表したい。この建築は、賞の趣旨である「建築文化の向上、(中略) 歴史・風土に調和した美しい景観を創造する社会的ストックに優れたデザイン」である今年度の「赤レンガ建築賞」に最も相応しい。

(北海道赤レンガ建築賞審査委員長 大野 仰一)